

# 現代日本語の「乱れ」とこれからの日本語\*

佐々木 一 隆

## はじめに

本論文は、現代日本語における気になることばを観察・分析して、それが本当に誤りであったり、ことばの乱れであったりするかについて考察する。そして、日本語が本来もっている性質あるいは言語の一般的な性質にも触れ、これからの日本語について考える。

現代日本語の考察にあたっては、次の5つの観点から順次論じていく。

- ・若者を中心としたことば（第1節）
- ・若者の使う意味不明なことば（第2節）
- ・「ら」抜きことばを科学する。（第3節）
- ・言語の一般的性質について（第4節）
- ・言語の多様性と変種について（第5節）

最後に「おわりに」において、今後の日本語の行方について筆者の考えを述べることにする。

## 1. 若者を中心としたことば：気になる日本語

この節では、黒田（2005）と北原編（2004）の中から用例と解説を引用し、必要があれば筆者のコメントも加えて、気になる若者を中心としたことばについて語用論、統語論、形態論、および音韻論の観点から論じていく。最初に、語用論の観点から、接客用語の例として（1）－（3）を見ることにしよう。<sup>1</sup>

(1) (会計の際にレジの店員などが)「5,000円からお預かりします」

(2) (ファーストフード店で、店員が)「いらっしゃいませ こんにちは。店内でお召し上がりでよろしかったでしょうか」

(3) 「こちら和風セットになります」

(1) はふつう「5,000円お預かりします」などと言うべきところを「5,000円から～」と言っている点が通常から逸脱している。この「5,000円から」については、5,000円以上から受け取るという説、「5,000円でお預かりします」の「で」の代

わりに「から」を使う方言が普及したという説、「5,000円から〇〇円をいただきます」の「〇〇円を」が省略されたという説、さらに「5,000円でお預かりします。その5,000円から代金の〇〇円をいただきます」という二つの文が、コンパクトに一つにまとまったとする説などがある。これらの説のいくつかは説得力があり、もし実際に妥当なら、「5,000円から」が必ずしも逸脱した表現とは言えなくなる。(2)は、店に入ってきた客に対して「～でよろしかったでしょうか」というように最初から過去形の「た」を用いている点が奇異に感じられ、「いきなり用法」と呼ばれている。(3)では、「なります」という部分を「変化する」と解釈すると、あとで和風セットに変化するわけではないので奇妙に感じられる。しかし、「この子はもう3歳になります」のように、「なります」には自然のなりゆきでの推移変化の結果、別の状態が現れるという意味もあることに基づいて、「予想から外れるかもしれないが、手順にそってちゃんと数えていくとそうなる」という自然な解釈が与えられるのと同様に、(3)の「なります」も「お客様の予想から外れるかもしれないが、これが先ほど注文されたものです」という謙虚な気持ち、あるいは客への気配りを表していると感じれば違和感はなくなる。また、このような「なります」は最近では「～でございます」の代わりに用いられ、「～です」よりは丁寧だとされている。

接客用語の問題から離れて、次に、(4)に示すような統語的な結びつきについて考えよう。

(4)「理由は特にはないです」

「日本の女の方も美しいです。殊にあなたなぞは—」(芥川)

これは形容詞の「ない」の後ろに敬体の「です」が続いており、文章語としては落ち着かない。「ありません」を用いるのが普通であり、これも現代日本語の「乱れ」のように思えるが、実は芥川作品の中にすでに「美しいです」という表現が見られ、必ずしも現代的な問題とは言えない。

今度は、形態論の観点から、語の内部構造を見てみると、(5)のように語の中で互いに隣接する音どうしが入れ替わる、音位転換 (metathesis) と呼ばれる現象が観察される。

(5)「ふんいき」(雰囲気) → 「ふいんき」

「あらた」(新) → 「あたら」 → 「あたらしい」

「さんざか」(山茶花) → 「さざんか」

当然「ふんいき」のほうが正用法だが、若者の間では「ふいんき」が広がっている。実際に、プロゴルファーの宮里藍がテレビのインタビューの中で「ふいんき」を使っているのを筆者は観察している。この音位転換の理由は十分には分らないが、「あらた」から「あたら(しい)」が、「さんざか」から「さざんか」が生じて定着しているという事例があるので、「ふいんき」が絶対的に誤りだと断定することはできない。また、これらの音位転換の例では、互いに隣接する音(例えば、「ふんいき」の「ん」と「い」)はそれぞれ日本語固有の拍(音節)／表音文字を構成しており、この音位転換はあくまでも日本語の音韻・文字体系(子音+母音または母音のみを基本単位とし、少数だが、「ん」などの子音が単独で基本単位となる場合もある)の範囲内で生じる。次の(6)は、「おざ」と「な」が転換している例だが、英語におけるaxとask間の音位転換(kとsという子音間での交替)とは異なり、やはり日本語固有の音韻・文字体系内部での変化である。ただし、「おざなり」は「その場での間に合わせ」、「なおざり」は「おろそか」という具合に互いに異なる意味を表すので、それぞれ×印の付いた音位転換の例は誤用である。

(6) 「おざなり」→「なおざり」／「なおざり」→「おざなり」

- おざりな謝罪のことは                      ×なおざりな謝罪のことは  
○災害対策がなおざりにされた。              ×災害対策がおざりにされた。

一定の語の前に「お」または「ご」を付けて敬語表現とするとき、その語が漢語の場合には「ご」を、和語の場合には「お」を付けると一般的に言われている。しかし、(7)に示した漢語のうち「誕生」以下は「お」を付けるほうが優勢であり、「和語」のうち「入り用」と「ゆっくり」は「ご」を付けるほうが優勢である。このことは、宇都宮市民講座の講演でも、受講者から同様の反応を得ている。

(7) 「お連絡」と「ご連絡」のどちらが優勢?

漢語：記入，安心，家族，注文，予約；誕生，返事，礼状，時間，食事

和語：人柄，体，詳しい，怒り，気遣い，気軽に；入り用，ゆっくり

このように、漢語・和語のルールに加えて、慣用や言いやすさなども「ご」か「お」かを決定する重要な要因となっている。

さらに、(8)のような文で用いられる「わたし的には」の用法を考察しよう。

(8) 「わたし的にはOKです」

この例における「わたし的には」は他の人はともかく、自分はこう考えるという意味を表すが、普通は「私としては」という表現が使われる。しかし、この変則的な表現にはそれなりの成立理由がある。すなわち、「的」を用いることにより、「動物的な感性」や「女性的なしぐさ」の例と同様に、「そのものズバリではないが、それに似ている」という意味合いが感じられるようになり、それによって自分の意見をあいまいにできるからである。また、「的」を使えば、「わたし的には」の代わりに「私としては」を、「気持ち的には（若いつもりだ）」の代わりに「気持ちの上では」などと厳密に使い分ける必要がないという便利さもあるからである。さらに、「動物」や「女性」のような漢語ではなく、「わたし」や「きもち」のような和語に「的」が付く点でも当該表現は変則的であり、筆者は、若者だけでなく、（若者に接する機会の多い）中年の間でもその使用を観察している。

最後に、短縮（clipping）による語形成の結果生じた若者ことばとして、(9)の例を挙げる。

(9) 「きもい」（＜気持ち悪い）

「きしょい」（＜気色悪い）

「うざい」（＜うざったい）

このような短縮が起こるのはもとの語も悪い意味をもつ場合が大半だが、筆者には、短縮によって意味の悪化がさらに進んでいるように思える。しかし、これらの例においても、日本語の音韻体系からの逸脱は見られない。

## 2. 若者の使う意味不明なことば

目からウロコの編集部／言語破壊研究班編（2005）『図解 平成ぶっこわれコトバ事典』によれば、現代日本語の乱れとしての「ぶっこわれコトバ」は、(10)－(16)のようなコギャル言葉、ヤング一般言葉、ネット言葉、アキバ系言葉、おとな言葉、幼児言葉<sup>2</sup>の6つの属性に分類される。

(10) あんぱん（コギャル言葉） コンビニエンスストアの「am.pm.」

(11) ガングロ→ゴングロ→バチグロ（コギャル言葉）

(12) ザラリーマン（ヤング一般言葉） ざらにいるサラリーマンのこと

(13) 全米が泣いた。（ネット言葉）大したことない。くだらない。期待はずれ

(14) ナマモノ(アキバ系言葉) 漫画やゲームなどの架空の登場人物に対し、  
実在する人物のこと

(15) ケアする。(おとな言葉) 手助けをする。サポートして補う。手当をする。

(16) ピエロ (幼児言葉) ビデオ (使用年齢制限4歳)

これらの例は各属性分類の代表的なものを示しており、(11)を除き、簡単な意味の説明が添えてある。(11)は顔が黒い状態の程度と活用変化を示している。「ガングロ」は日焼けやメイクなどで顔が黒い状態を、「ゴングロ」はさらに黒い状態を、「バチグロ」は究極の状態をそれぞれ表し、いわば原級・比較級・最上級の活用変化を形成している。

ファーストフード店のマクドナルドには、次のような省略した言い方がある。

(17) マック, マクド, ナルド, ドナル (<マクドナルド) (ヤング一般言葉)

これらの短縮形は、特に省略箇所が後部か、前部か、前部と後部の両方かの点で異なるが、いずれも日本語の音韻体系、語形成の規則にのっとっている。なお、このような短縮は、日本語に限らず言語一般に見られる現象で、例えば英語でも math(emetics), (air)plane, (in)flu(enza) のような短縮が可能である。

### 3. 「ら」抜きことばを科学する。

「ら」抜きは本当にことばの乱れなのか? この節では、大津(2004a)に基づき、答えは否であるということを論じる。

「ら」抜きことばとは、(18)のような文における「止められる」の「ら」が落ちて、「止めれる」のようになることをいい、共通部分(活用の際に変化しない語幹)が母音で終わる動詞(例えば、*tomeru*の中の*tome-*)に*-rareru*をつけて*tomerareru*となった場合に、“-ra-”が脱落して生じる。これに対して、共通部分が子音で終わる動詞「読む」(*yom-u*)のような場合は、共通部分に*-eru*をつけて(21)のように*yomeru*となり、“-ra-”の脱落は関与しない。

(18) 君ならあいつを止められる。(可能)

(19) 行こうと思ってたんだが、母に止められちゃってね。(受け身)

(20) 先生がそのけんかを止められた。(尊敬)

(21) この本なら簡単に読める。(可能)

(22) この本は多くの中学生に読まれている。(受け身)

(23) 先生はいつもたくさんの本を読まれている。(尊敬)

ここで注意すべきことは、(18)–(20)のうち「ら」抜きが起こるのは(18)のような可能を表す場合のみであり、(19)のような受け身や(20)のような尊敬を表す場合には、「ら」の脱落は起こらない。(18)の「ら」抜き現象は、(21)–(23)の「読む」のような場合において、(21)のような可能の意味が「読める」という別の形式を用いて、他の2つの意味との区別をしていることと無縁ではない。すなわち、「読める」の場合に習って、他の2つの意味と区別するために、(18)のような例では「ら」が落ちて、「止めれる」が可能となったと分析することができる。もしこれが妥当な見方なら、「ら」抜きは十分に動機づけのある表現であり、今後さらに普及・定着する可能性がある。<sup>3</sup>

#### 4. 言語の一般的性質について：省略現象とあいまいさ

他の動物のコミュニケーションと比べると明確になるが、人間が普段使っていることば(自然言語)は質量とも豊かであり、人間だけに、しかもひとり一人の人間に平等に与えられたものである。このように人間が自然な場面で使うことばには多様性が見られる反面、共通性／一般性／普遍性も存在する。この節では、大津(2004a)に基づいて、言語の一般的／普遍的な性質について考える。

結論を先に言えば、(24)–(26)に示したような日本語(大阪弁)の接続表現「て」と、(27)–(29)に示したような英語の接続詞thatの省略現象にはかなりの共通点が観察でき、これは言語の一般的／普遍的性質の現れと考えることができる。

(24) 佑介、自分が悪い(て)言うてた。

(25) 佑介、自分が悪い\*(て)わめいていた。

(26) 佑介、自分が悪い\*(て)しつこう言うてた。

(27) Yusuke said (that) he was wrong.

(28) Yusuke shouted \*(that) he was wrong.

(29) Yusuke said sadly \*(that) he was wrong.

まず、日本語から見よう。(24)のような日本語(大阪弁)の複文において、主節の動詞が「言う」の場合は接続表現の「て」を省略できるが、(25)における「わめく」のように「言う+ $\alpha$ 」の意味をもつ動詞の場合は「て」を省略できな

い。また、(26)のように、主節に「言う」が用いられていても、「しつこう」のような副詞が介在して「て」と「言う」が隣接しなくなると「て」は省略できなくなる。同様のことが、(27)－(29)の英語の場合にも当てはまる。すなわち、(27)のような英語の複文において、主節の動詞がsayの場合は接続詞のthatを省略できるが、(28)のように「say+ $\alpha$ 」の意味をもつ動詞shoutの場合はthatを省略できず、さらに、sayとthatの間にsadlyのような副詞が介在すると、thatは省略できなくなるといふことである。このように、少なくとも日本語と英語の間には、言語や方言などの違いを越えて成立する一般性や普遍性が存在する。

次に、言語にはあいまいさが存在するという一般的な性質も見つめるために、(30)を考察する。

(30) 憲法に違反する形での参拝 (大津編著 2004b: 70)

大津編著 (2004b) によれば、この表現には2通りの解釈がある点であいまいであり、解釈の際に注意を要する。1つは「(靖国) 参拝には憲法に違反する形のもの」とそうでない形のものがあるが、そのうちの前者」という制限的な解釈であり、もう1つは「(靖国) 参拝はいかなる形のものであっても憲法に違反する」という非制限的解釈である。このような表現が用いられた場合に、聞き手としてはどちらの解釈を意図しているのかを見極めることが大切である。また、話し手はこのようなあいまいな表現を意識しないで使って相手に誤解を与えたり、逆にトリックとして意識的に利用して、かつては非制限的解釈の立場だった政党が、与党になってからは制限的解釈の立場に変わったという矛盾をつつみ隠したりすることもありうる。こうした制限的解釈か非制限的解釈かのあいまいさは英語にもあり、さらに言語一般にあてはまるものである。ただし日本語の場合、*comma intonation*の違いによって両者を区別できないので、あいまいさは英語の場合より高くなる。

日本語の複文において接続表現の「て」が脱落するのは、インフォーマルな表現として、あるいは日本語の「乱れ」として受け止められるかもしれない。また、日本語のある表現があいまいで誤解を生じる場合、それも日本語固有の否定的な面と感ぜられるかもしれない。しかし、こうした現象は日本語特有の「乱れ」ではなく、言語の一般的な性質から出てくる可能性もあるので、事の本質を見極める必要がある。

## 5. 言語の多様性と変種について：日本語の鼻濁音

前節では言語の一般的な性質を見たので、この5節では、言語の多様性を示す例として日本語の鼻濁音の衰退について触れることにする。

Hibiya (1999) は、言語には様々な変種が存在するという立場から、主に東京の下町（根津）で10代～70歳代以上の男女を対象に、「銀と東」「劇と陰」「花が咲く」などの例を通して語中と語頭の“g”の音を観察し、鼻濁音の有無について調査した。<sup>4</sup> 言語内部の要因（複合語の種類、有声音化など）と社会的要因（年齢、性別、山の手との接触の有無など）の観点から分析を行い、その結果、鼻濁音は要因ごとにばらつきが認められるものの、若者を中心として急速に衰退しつつあることが分かった。また、たとえ同じ若者でも、“g”が語のどの位置に現れるかによって鼻濁音化の程度に差が見られた。

このように同じ日本語（東京の下町ことば）と言っても、その実像は、言語内部の要因と社会的要因が複雑に絡み合って多様な様相を呈している。そしてこのような状況の中で、若者を中心に鼻濁音が急速に衰退しているという変化が起きている。言語の変種とその歴史的変化を見ると、人為ではコントロールできない流れが感じられる。

### おわりに

本論文では、現代日本語の現状について、若者を中心としたことば、若者の使う意味不明なことば、「ら」抜きことばの科学、言語の一般的な性質、言語の多様性と変種の観点から論じてきた。締めくくりにあたり、これからの日本語の行方に関わる要点を箇条書きとして提示する。

- (A) 現代日本語の「誤り」や「乱れ」はあくまでも日本語内でのことであり、日本語の音韻論、形態論、統語論などの制約に従うものである。
- (B) 現代日本語の「誤り」や「乱れ」は、日本語に限らず、言語一般にかかわる制約や特徴が反映されている場合もある。
- (C) ことばには様々な変種がある。
- (D) ことばは歴史的に変化するものである。
- (E) 一見おかしいと思っても、それぞれの表現には可能となる理由がある。

(例) 一定の規則（語形成や文法など）、言いやすさ、経済性；相手への配慮、



伝えようとする話し手の意図、状況や場面など

- (F) 理由として、日本語（あるいは言語一般）の性質に由来する場合と、日本文化から生じた場合があると思われる。
- (G) その結果、音声・語彙・文法などが標準から外れるような例が生じる。

以上のことをふまえて、筆者は今後の日本語の行方に対して、次のような見解と展望をもっている。すなわち、日本語の「誤り」や「乱れ」はそれほど気にしていないということである。なぜなら、意味不明のことばが氾濫しているが、大半は自然にすたれるし、日本語教育の改善も必要だが、ことばの「乱れ」や変化は諸制約の中であるようにしかならない面も多いと考えているからである。

\*本論文は、2005年8月3日に宇都宮市中央生涯学習センターにおいて筆者が行った講演「これからの日本語はどうか？」（平成17年度前期宇都宮市民大学「日本語あれこれ大百科」第10回・最終回）の内容に基づくものである。

## 注

1. 基本的に、例文 (1) - (2) とそれぞれの解説は黒田 (2005) から、例文 (3) - (10) と対応する解説は北原編 (2004) から引用している。黒田 (2005) は、(1) については池上 (2000)、井上 (2004)、矢橋 (1994)、梅津 (2004) などを、(2) については塩田 (2002) などを参照して、興味深い考察をしている。
2. 幼児言葉はけっして「ぶっこわれコトバ」ではないが、その言葉の壊し方に共通するものが多く見られるので、この属性分類に入れている。
3. 歴史的に見ると、「止める」のように共通部分が母音で終わる動詞だけでなく、「読む」のように共通部分が子音で終わる動詞にも -rareru が付いて「読まれる」が可能の意味を表していた。このような歴史的考察をふまえて、大津他 (2002: 230-233) では、言語獲得、外国語習得、語形成などにも適用される類推の概念を用いて「ら」抜き音化の発生を説明している。
4. 一般に、語中の “g” のほうが鼻濁音化すると言われている。

## 引用文献

- 池上彰 (2000) 『日本語の「大疑問」』 講談社+α新書.
- 井上史雄 (2004) 「近ごろ気になる敬語のはなし」『NHK日本語なるほど塾8月号』  
日本放送出版協会.
- 梅津正樹 (2004) 「気になることば」『NHKアナウンサーのはなすきくよむ』  
日本放送出版協会.
- 大津由起雄、池内正幸、今西典子、水光雅則 (編) (2002) 『言語研究入門：生成  
文法を学ぶ人のために』 研究社.
- 大津由紀雄 (2004a) 『探検！ことばの世界』 ひつじ書房.
- 大津由紀雄 (編著) (2004b) 『小学校での英語教育は必要か』 慶應義塾大学出版  
会.
- 北原保雄編 (2004) 『問題な日本語』 大修館書店.
- 黒田美香子 (2005) 「接客用語に見られる日本語の変化：ポライトネスの観点か  
ら」宇都宮大学国際学部卒業論文 (2004年度).
- 塩田雄大 (2002) 「「よろしかったしょうか」はよろしくないか～平成13年度 (後  
半) ことばのゆれ全国調査から～」 『放送研究と調査』 2002年3月.
- Hibiya, Junko (1999) “Variationalist Sociolinguistics.” In Natsuko Tsujimura, ed.  
(1999) *The Handbook of Japanese Linguistics*, Blackwell Publishers, pp. 101-120.
- 目からウロコの編集部 / 言語破壊研究班編 (2005) 『図解 平成ぶっこわれコト  
バ事典』 第三文明社.
- 矢橋昇 (1994) 『日本語点検 続・ちょっと気になることば』 七賢出版株式会社.